

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# 保育内容「人間関係」に関する研究：4歳児の積み木遊びに焦点を当てて幼児が周囲とのかかわりを広げていく過程を捉える

著者	森田 満理子
雑誌名	川口短大紀要. こども学科篇
巻	22
ページ	135-151
発行年	2008-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000746/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000746/</a>



# 保育内容「人間関係」に関する研究

— 4歳児の積み木遊びに焦点を当てて幼児が

周囲とのかかわりを広げていく過程を捉える —

森 田 満理子

## I 保育内容の動向と現状

平成17年1月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について」は、中央教育審議会から幼児教育についてなされた初めての答申として注目された。「この時期に経験しておかなければならないことを充分に行わせることは、将来、人間として充実した生活を送る上で不可欠である」として幼児期の重要性和質の高い保育の必要性が強調された。特に、「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の推進」が提唱され、小学校との教育の連続性が図られることや幼児期の学びが小学校以上の教育の基盤となっていることなどの4つの視点が示され、さらに、これらの視点から「協同的な学び」が大切であると言及された<sup>1)</sup>。

同年2月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから発行された幼稚園教育指導資料『幼児期から児童期の教育』では、「幼児期から児童期への教育を豊かにする視点」の1つに「人間関係の深まりに沿って協同性を育てる」ことがあげられた。ここでは、「協同性が育つ中で自発性が育つ」という考え方とともに、園生活前半では協同性の芽を育むこと、後半では協同性の質を高めていく必要があることが述べられている。さらに、「小学校教育と連携する」ことも続く。ここでは、これからの幼稚園においても小学校においても、学び方のつながりを図るという観点から、友だちと協同で学びを展開することなどについて同様に重視すべき学び方の1つであることが記述されている<sup>2)</sup>。

中央教育審議会幼稚園教育専門部会で主査を務めた無藤隆氏によれば、平成20年3月改訂・告示の幼稚園教育要領での重要な保育改善の視点に、幼小の連携があり、また、小学校側でも、幼稚園や保育所との交流活動が平成9年度以降、生活科の授業で義務づけられたことにより、教職員同士の連携や指導計画への位置づけが求められ、更に、カリキュラムの接続も課題となると

いう。「とくに自己抑制や学びの協同性、さらには体験・学びの多様性と関連性といった視点からの、一貫性のあるカリキュラム」の作成が必要であり、同時にスムーズな接続を図るために、「年長の3学期から小1の1学期にかけての教育のあり方を、互いに話し合うことも重要になると述べている<sup>3)</sup>。

さらに、保育内容の改訂については以下のように言及している。領域「人間関係」における追加が最も多く、領域「人間関係」の改訂のポイントは4つであり、そのうちの1つは協同性をのぼすことである<sup>4)</sup>。これは、平成17年1月の中央教育審議会の答申で「協同的な学び」が大事であると述べられたことを受けているとも述べている<sup>5)</sup>。

さて、今回改訂された幼稚園教育要領の領域「人間関係」の記述のうち、協同性をのぼすことにかかわる加筆を見ると、「内容」では、「いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。」「友だちと楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする。」「内容の取扱い」では、「特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようになること。」「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」<sup>6)</sup>とされている。

併せて文部科学省『幼稚園教育要領解説』（平成20年）にあたると、「内容」「内容の取扱い」の記述の意味するところは、単に幼児同士と一緒に活動することではなく、「互いにかかわりを深め」て協同して遊ぶことが大切にされなくてはならず、そのためには、「他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する」過程を重ねなくてはならないということである<sup>7)</sup>。幼稚園教育では、ただ単に集団で活動することを求めるのではなく、人間関係の深まりに沿っていくことや、保育者から一方的に目的があてがわれるのではなく、幼児同士が共通の目的を生み出していくことの重要性が込められていると読みとれる。

保育実践の現状をみると、「協同的な学び」とか「協同的な活動」といった表現が用いられており、その意味する実践内容も様々である。

高杉自子氏は、幼児教育の体質として「幼児教育のあるべき姿のイメージがまちまちであり、ほとんどが幼児の発達とは関係なく行われていても指摘を受けず独断と偏見が横行する」ことがあり、なぜ幼児期に集団施設教育をするのかという根本問題をしっかりと捉えない限り、幼児とかけ離れ、大人の指導性が中心となる保育の傾向は改まらないと指摘している<sup>8)</sup>。この指摘の通り、国レベルでは幼小の連携や協同性を伸ばすことの重要性が、幼児期の教育を豊かにする視点で強調されたとしても、実践の場では、こうした視点で保育内容の充実と質の向上が図られることに繋がらないことが危惧される。「幼小の連携」や「協同性を伸ばす」といった言葉が一人歩

きして、本来の幼稚園教育要領改訂の趣旨とは、別の方向性で実践がなされていく危険がある。

## II 研究の目的と方法

### 1 研究の目的

以上のような動向と現状を踏まえ、本稿では、保育内容「人間関係」における協同性にかかわる内容に焦点を当てることにする。特に幼児が周囲の幼児とかかわりながら、次第に大きな集団での生活を意識するようなる中で、充実感を味わい、自発性を育てていく過程を丁寧に捉えて整理する。こうした過程を明らかにすることは、「幼小の連携」や「協同性を伸ばす」ことが、幼児期後期の問題ではなく、それ以前からの経験によって後期の協同性の開花への素地が育まれていることを証明することになると考えている。又、保育者の強要ではなく、幼児が自発的に相互にかかわり合い、関係を広げたり深めたりしている保育現場での姿が明らかになることで、幼児の力を信頼し、目の前の幼児から出発する幼児教育の本質を基軸とすることが、そのまま、時代や社会の要請に応えることにつながることを確認できるとも考えている。

### 2 研究の方法

筆者が学級担任していた平成18年4月から平成19年3月までの保育実践を研究対象とし、その中からプラフォーミング（ウレタン性の積み木）を用いた幼児の遊びを抽出した。プラフォーミングの遊びに焦点を当てる理由は、季節を問わず、年間を通して展開される遊びであり、経験の内容の比較がしやすく変化が捉えやすいためである。また、プラフォーミングは大きな積み木であるため、実際に出入りできる場作りなどの素材として用いられ、複数の幼児と一緒に持ち運ぶなどかかわり合って遊ぶ状況が自然に生じやすいためである。

プラフォーミングは、4歳児の1年間、幼児の用い方に応じて、設置の場、積み方などを変化させながら継続的に設置していた。学級は、埼玉県内の国立の幼稚園で、2年保育・3年保育混合4歳児1学級36名（男女各18名）である。

具体的な方法は、保育の実践者である筆者が記述した記録を、協同性の芽生えの視点に立って、それぞれの場面での経験を整理した。その際、他の活動での姿も思い起こしながら考察し、積み木遊びを視点にしながらも他の活動での経験の過程としても同じような育ちの過程が捉えられると実感しながら作業をすすめた。

### Ⅲ 結 果

#### 1 事例及び事例考察から見出した幼児の経験の内容

協同性の芽生えの視点から事例を考察し、4歳児が周囲とのかかわりを広げていく1年間の過程を、経験の内容によって整理した結果、以下のような過程が捉えられた。

表1 4歳児が周囲とのかかわりを広げていく過程

月	協同性の芽生えの視点から捉えた経験の内容	事例
	生活を共にしてきた仲間の存在を感じながら安心して遊ぶ（進級児）	1
4	初めて出会った相手と触れ合いながら遊ぶ（新入園児）	2
5	大勢の居る場で自分の居場所を見つけて過ごす	3
6	関心をもった幼児2, 3名で誘い合って、一緒にじっくり過ごす	4
6~7	いろいろなごっこ遊びに参加しているいろいろな友達とかかわりをもつ	5
9	4, 5名の小集団で考えを出し合いながら工夫して遊ぶ	6
10~3 (2学期中頃最も盛ん)	大勢での遊びに参加する	7
10~3 (2学期後半から3学期盛ん)	気の合う小集団で共通の目的を持って遊びをすすめつつ、他の小集団の遊びを意識し、刺激し合う	8

#### 2 事例及び事例考察

表1の事例番号は以下の事例番号と一致して示した。

##### 事例1 【生活を共にしてきた仲間の存在を感じながら安心して遊ぶ 4月】

①4月11日 進級児のみの登園1日目。

9:10 登園後、着替え等済ませた幼児から遊び始める。

9:20 プラフォーミングの幼児達はほとんど言葉を交わさず、各自が黙々と運んでは組み立て、乗り物を作っている。「あっそうだ、こうしよ」などと考えたことを言葉にする幼児がいます、関心を示してその幼児を見る幼児もいます。

E男とR男は2人で乗り物を作っている。

ままごとコーナーにいたH子、I子、J子、L子の4名がプラフォーミングの様子を近くに来て見ている。H子が、最も薄くて長い直方体のプラフォーミングを選ぶと、他の3名も同じ形のものを探す。全員が持つと窓際まで急ぎ、並んで立ち、プラフォーミングの様子を見ていたかと思うと、大きなものを抱えた互いの様子を見合い、にこにこ笑顔になる。その後、テラスへ出て、一列になって行ったり来たりしてうれしそうにしている。



- 9:30 女児は、皆がままごとコーナーに入っており、プラフォーミングには、男児全員が参加している。
- 9:40 R男は、プラフォーミングで小さな乗り物を作り終わると、同じ室内の組みブロックのコーナーへ移動して遊び始める。一緒に作っていたE男は、そのままプラフォーミングに残る。
- 9:50 組みブロックに移る幼児が多くなり、プラフォーミングでの遊びを続ける人数が減ってきた。それまで他の幼児の使っていたもの（出来上がっている乗り物など）を運び、自分の積み木として使い始めている。Q男は「発車ー！」と大きな声で言うと、作った乗り物から大きくジャンプして飛び立ち、周囲を走っている。

- 9:55 B男とE男は、2人で一緒に作り始める。

E男「そうだ、こっちと繋げよう、ねっ、繋げていい？」

B男「いいね、繋げようね。もっともっと大きくなるしね。」

E男「そうだね。よーし、繋げるぞー。」と飛び跳ねる。

互いに代わる代わる持ってきて、自分の思い通りに広くしたり高くしたりするが、トラブルにはなっていない。

先程、長いプラフォーミングを持っていたH子とI子は、ままごとに加わっていたが、少し抜け出して、様子を見に来る。何も言わず、しばらく見ている、再びままごとへと帰っていく。



#### ②4月12日 進級児のみの登園2日目。

前日と同様に、各々での乗り物作りが行われている。自分の乗り物を作ると、乗ったり乗せたり誘い合う姿が見られる。

B男とE男は本日も「一緒に作ろう」と誘い合ってから遊び始めている。

G男は、他の幼児の作ったものから1つずつ持ち運んでは自分の乗り物を大きくしている。

B男とG男も、どれを使おうか相談しながら、自分たちの乗り物に運んでいる。



本園では、3年保育の進級児20名と2年保育の新入園児18名とが同じ学級として4歳児の1学級になる。新入園児だけでなく、進級児にとっても4月からの生活は、新しい保育室、遊具、保育者、さらに、18名の新しい友だちを迎え、たいへんな生活の変化を要求される。そこで、例年、4月の初めから36名での学級生活を始めるのではなく、進級児、新入園児が別々に2日間ずつ登園して、20名程度で、所持品を始末する場、水道、トイレ、など新しい場での生活を体験し、遊具についても試せるようにしている。

進級児にとっては、それまでの4歳児が用いていた遊具を、今度は自分たちが自由に使えるという期待は大きい。登園後、着替えなどを終わると、早速プラフォーミングに取りかかり、うれしそうに遊ぶ姿が見られた。H子らのように、特に何かを作るわけでもないのに仲間と一緒に抱えている様子からも、新しい遊具に触れてみたい気持ちが伝わる。

進級児皆が同じ保育室内で、互いに存在を感じながら遊ぶことで安心感を得ることができる。そんな中で、新しい遊具を試すことで、進級の喜びを大きくし、明日の園生活への期待を膨らませている。

## 事例2 【初めて出会った相手と触れ合いながら遊ぶ 4月】

## ①4月14日 新入園児のみの登園1日目。

9:10 登園後、着替え等済ませた幼児からプラフォーミングで遊び始める。C男は「これ積み木でしょ。おっきい(大きい)。やっていいでしょ。」と教師に聞く。I男も「やっていいの」と尋ね、笑顔でプラフォーミングを触る。何度も行き来して、どんどん積み重ねる。後からやってきた幼児も各々積み始める。

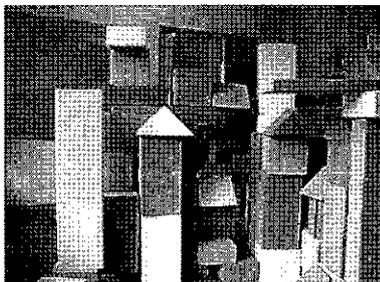
9:20 ままごとも始まる。絵を描き始める幼児もいる。プラフォーミングでは、背の届く高さまで積むと止めて、絵を描きに行ったり、正床積木、組みブロックを並べ始めたりと、興味に移る幼児が多くなった。

依然としてプラフォーミングを続けている幼児は、さらに高く積もうとしている。M男はプラフォーミングを運んでは積む。A子は背が高く「ほら届く」と言いながら、M男の積んだ上にさらに積み重ねる。小さなQ子は運んではA子に手渡している。A子は、プラフォーミングを踏み台にしてさらに上に積んでいる。



9:30 J男が、他の幼児が積んだまま他へ遊びに行ってしまう使われていないプラフォーミングを一つずつ運び始める。入園前からの顔見知りのN男に「一緒に作ろう」と声をかけて始める。

9:40 近くにいたC男も「入れて」とJ男らに加わる。J男がプラフォーミングを持って「おとっと」とバランスを崩す。見ていたC男が「おい、ここに載けると面白いぞ」と提案し、シーソーのような形を作って乗っては、転がることを繰り返して楽しんでいる。



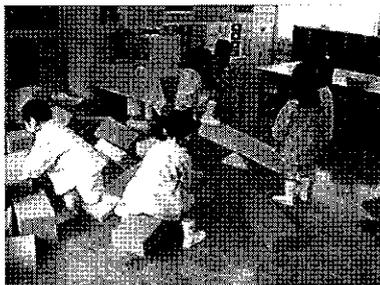
9:45 高く積まれた積み木が大きな音を立てて倒れ「キャーッ」と歓声を上げる。J男が真っ先に他のものにも体当たりし、故意に崩すと、C男をはじめM男など周囲の皆が崩れて山になったプラフォーミングの上を渡り始める。

9:50 I男が「これ、シーソーみたいだよ。ガッタンってなった」と三角柱の上に直方体が載ったものを指して言う。

C男「シーソー、さっき俺も作った」

J男「そっか、シーソー作るっか」

周囲から「俺も」等と同意の声が挙がる。皆がシーソーを作り、近くの幼児と一緒に乗り始めた。他の遊びをしていた幼児も戻ってきて加わり、あちこちでシーソー遊びになる。近くの幼児と一緒に三角柱や直方体を探して組み、乗っては互いに体が衝突し、大喜びしている。



## ②4月17日 新入園児のみの登園2日目。

9:10 着替え終えた幼児から次々にプラフォーミングに取りかかる。

9:20 高く積んでいる幼児の様子を見ると、自分の運んできたものを、そこに積み重ねている。M男が三角柱を乗せると、A子が「もっと作ろう」と言う。プラフォーミングを運んできた幼児が積むと、また別の幼児が積んで、何本もの柱が出来上がる。

進級児に次いで、新入園児だけが登園する。全く未知の場での生活を一緒にスタートすることによって、生活の仕方や遊びのすすめ方を周囲の幼児と同じようなペースで経験していくことが出来る。プラフォーミングについても、ほとんどの新入園児にとっては初めて体験する遊具であろう。家庭では経験できない魅力的な遊具の1つである。

交替で積み重ねて高くしたり、一緒にシーソーを作り、乗っては転がったりする遊び方。また、故意に崩したり、崩して出来上がった山の上を歩いたりする遊び方など、単純な遊び方であるから共有しやすく、初めて出会った幼児同士が、体を触れ合わせて遊ぶことが出来る。テンポよく、また、全身を使って遊べるため、いっそう心が弾み、新しい生活の楽しさや期待が膨らんでいるであろう。

### 事例3 【大勢のいる場で自分の居場所を見つけて過ごす 4月・5月】

①4月20日 新入園児18名と進級児20名とが一緒に登園するようになり、3日目。

9:30 新入園児、進級児が同じ場で遊んでいる。互いに別々に3名程度の小さなグループを作り、乗り物や家を作っている。新入園児のグループの1つでは、F子がイメージを言葉で表しながら組み立てている。一緒にいるN子は聞きながら手を貸している。E子は2人の様子を見ながら、にこにこし、家に腰を下ろしている。

9:50 ままごとをしていたB子（新入園児）がプラフォーミングにやってきて、いろいろなグループの様子を見て回り、D男（進級児）が一人で作っている乗り物に興味を示して近づく。

D男「これ、三角繫げると出来るんだよ。ここは、こうやって…」とB子に説明を始める。

B子は恥ずかしそうな表情をしながら、聞いている。



②4月28日 F子を中心とした新入園児の4名は、プラフォーミングで遊ぶことが数日間続いている。

9:50 F子らのグループは、ようやく家を作り終える。

F子「ここ、冷蔵庫ね、バナナ持ってきてください。次はメロンね…」

幼児ら「はいバナナですよー」と元気よく応えながら色の合ったプラフォーミングを運んでいる。

③5月11日 前日の10日。戸外で遊んでいたG男（進級児）が室内へ戻り、プラフォーミングで遊ぼうとしたが、既にたくさんのもが出来上がっていて新たに作るスペースはなかった。G男は、しばらくその場で遊んでいる幼児らの様子を見つめていた。保育者がテラスへ持ち運ぶことを提案すると、G男は、すぐにテラスへと運んで乗り物を作り始めた。

9:15 G男は、着替えを済ませるとすぐに室内のプラフォーミングをテラスに運び出し、乗り物を作り始める。様子を見て、同じようにテラスに運び出す幼児が現れる。

L子（進級児）、D男（進級児）が次々にプラフォーミングを運び出し、自分の乗り物を作り始める。

続いて、C男（新入園児）、I男（新入園児）が2人で言葉を交わしながら、一緒に運び出し、2人の乗り物を作り始める。2人は、進級児とは少し距離を置いている。乗り物を作り終えると、進級児が乗り物に乗って言葉を発したり、体を揺すったりする様子をじっと見ている。（右の写真の2人。2人以外は進級児である。）



9:30 R男（進級児）が、室内のままごとコーナーから、遊具を運んできて、乗り物のそばに場作りを始める。

H男（進級児）「もっと持って来よう」

R男「全部、全部」

H男「よっしゃー」

周囲の幼児も乗り物を降りて、急いで保育室に入り、遊具を運び出してくる。運ぶものがなくなると、再び乗り物に乗り、ハンドルをきるような格好をしながら、体を前後左右などに揺すりつつ、「ヒューン」と言っている。新入のC男とI男も大きな声を出して遊び始める。

- ④5月12日 朝から大勢の幼児が戸外へ飛び出していく中、進級の3名、A男、E男、P男だけは、戸外へ出ず、お互い誘い合うと、テラスでプラフォーミングを始める。



新入園児も進級児も一緒に登園するようになると、学級の幼児数は36名にもなる。特に、進級児の戸惑いが大きいように感じられた。

①②では、大勢の中でも、自分のしたいことを探して積極的に始めたり、遊びに加わったり、興味を持って見たりしているなど、大勢の中にあっても自分のペースで行動できている幼児の姿が捉えられる。

③は、プラフォーミングを運び出して遊び始めたG男の様子を見て、大勢の幼児が同じことを始めた場面である。さらに、R男が、室内のままごと遊具を運び始めると、大勢によって、ついでにはすべての遊具が室内から運び出された。室内の出入り口を跨げばすぐにテラスであるが、幼児にとっては、室内の遊具をテラスに持ち出すことはとても楽しいことである。4歳児学級では、毎年、この時期に、遊具を持ち運んで遊ぶことが繰り返されている。持ち運ぶだけの単純な遊び方であるため、周囲の幼児と同じように遊ぶことができ、大勢の中でも自分の居場所を見出せるようである。



④は、大勢がすすんで戸外に出ている中、進級児の3名が、自分たちだけの安全基地で過ごすように、プラフォーミングで遊ぶ姿である。他の幼児のいないところで、以前からの友だちと遊び、自分の居場所を確認し、安心感を得ていると捉えた。

進級児は、園生活を重ねてきたとは言っても、それまでの仲間とは異なる仲間が一度に増えることは、大きな環境の変化である。クラスの人数が増える前は、「新しい友だちが来るからうれしい、早く新しい友だちが来ないかな」などと話していた幼児も、いざ大勢での生活になると、不安そうな表情をするなど戸惑っている様子が見られた。大勢から離れて気の合う友だちと安心して過ごせる場を見つけて過ごすことは、突然に大勢になった環境の中で、自分の居場所を確かめることのできる大切な時間である。

## 事例4 【関心をもった幼児2, 3名で誘い合って、一緒にじっくり過ごす 6月】

6月13日

10:00 戸外で一緒に遊んでいたJ男（新入園児）とL男（新入園児）が保育室に戻り、プラフォーミングを始める。

J男「電車作ろう」 L男「おいしいぜ、作ろう」

J男「2人だけで乗れるやつにしよう」 L男「そうしよう」

10:05 C男（新入園児）がやって来てプラフォーミングに登り、J男とL男の様子を見ている。

10:15 保育者が近づくと、J男とL男は笑顔でうれしそうである。  
J男「いいでしょ。ちょうど2人用なんだよ、ほら見て…  
これが車輪で、屋根もあって…ハハハ〜」

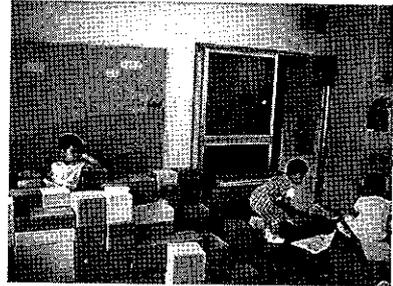
保育者「ほんとだね、いいね、2人にちょうどいいね、車輪も屋根もすごいじゃない。」

J男とL男は「ハハハ、ハハハ」と笑う。

C男もにやにやしている。

保育者「今日、I男（新入園児）休みだものね、今度来たら、2人で一緒に作ってみたら。」

保育者がC男に話しかけると、C男は何度も頷く。



6月中旬になると、遊んでみたいと思う相手と誘い合い、2人や3人といった少数でじっくり過ごす姿が多く捉えられた。砂場で同じ掘り方で穴を掘り進めたり、画用紙を並べて2人でそっくりの絵を描いたり、プラフォーミングでも、ちょうど2人で乗れる乗り物や、同じ形の乗り物を作ったりする姿があった。保育者が近づくと、「いいでしょ、2人だけの場所なんだよ」「おんなじことしてるんだよね」「〇〇ちゃんと遊んでるんだよね」等、関心をもった相手と自分たちだけの空間で過ごすうれしさを言葉に表す幼児もいた。

新入園児同士も活発に誘い合っていたが、特に進級児が新しい友だちである新入園児に興味を持って、自分から誘いかける様子がよく見られた。日によって誘う相手を変える幼児もいれば、同じ相手と数日間遊んだり、さらに長期間遊ぶ幼児もいた。

## 事例5 【いろいろなごっこ遊びに参加しているいろいろな友達とかかわりをもつ 6月・7月】

①6月9日

9:30 進級児、新入園児の男女が一緒になって、プラフォーミングとすべてのままごと遊具をテラスに運び出し、家を作っている。各自それぞれの場所を作りながら、「入るところはここ、これでいいか…じゃ、こっちは…どうしよっかな、そうだ」などと言葉で言い表している。



②7月18日

9:30 F子がプラフォーミングを組み立てる。薄くて長いものばかりを並べて壁のようにしている。

9:45 F子「ここ、お医者さんね、お医者さんが診察するところはここ」

B子も加わり、2人で壁を作り始める。

F子「ここは診察室だからね」

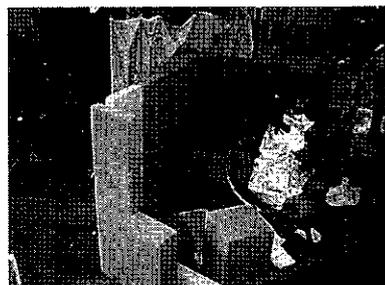
F子は言いながら、籐の椅子を運び入れる。

F子「それで、待つ人は…と、こっち」

F子が1脚椅子を運ぶとB子も「こっちね」と言いながら、椅子を運んで並べる。

F子「まず、私がお医者さんね…」

F子は診察するマネをすると、「次はB子ちゃん、B子ちゃんがお医者さんだよ」と言い、交替する。数名が加わって椅子に座って順番を待つ。



6月には、特定の相手とだけではなく、周囲で行われているごっこ遊びにすすんで参加し、そこにいろいろな幼児と触れ合っている姿も見られた。

①は、家のイメージに不足しているものをプラフォーミングを活用して補っている。遊具を運び出す作業に参加しながら、自然と1つの場作りが始まった。一緒に共通の場を作っていることを意識して、自分の分担している作業について、周囲の幼児にアピールしながらすすめている様子が印象に残った。②は、F子が自分のイメージで場作りすると、周囲の幼児はしばらく見守っていたが、F子の言葉によってイメージが湧いたのか、次々と加わっている。診察室を再現するように工夫して組み立てられた様子も興味深く、病院ごっこという設定も多くの幼児を惹きつけたようである。

プラフォーミングでは、一緒に遊びの場を作ったり、その場を拠点としたごっこなどの遊びの中で友だちとのやりとりを楽しんだりすることもできる。場の見立ても自由に出来ることから、特定の種類のごっこ遊びだけでなく、さまざまなごっこ遊びの場として、いろいろな幼児が参加して触れ合う機会が保障される。

#### 事例6 【4, 5名の小集団で考えを出し合いながら工夫して遊ぶ 9月】

9月21日

9:25 戸外に出ていたE子(新入園児), F子(新入園児), H子(進級児), L子(進級児), N子(新入園児)の5名が室内に戻って来る。F子が「そうだ、シーソー作る」とプラフォーミングを持って来ると、L子も隣に作る。E子がL子と交替してシーソーに乗る。「キャー」と言いながら乗っている。

F子「ねえ、これ、繋げない?たくさんさあ」

N子「分かった，コースみたいにするってことね，シーソーコース，シーソーコース，シーソーがいっぱい出来るコース」

E子「どうやって繋げる？」 幼児ら「どうしよっか」

F子「わかった」

E子「あっ待って，もう一回やらせて」 幼児ら「私も私も」

F子「あーん，分かったよ，早くやっちゃって」

幼児ら次々に駆けてガットンとガットンと渡る。

F子がプラフォーミングを動かし始めると，他の幼児も続く。

作っては乗り，作っては試し乗りをしている。いくつものシーソーが出来ると誰ともなく「わー出来たー」と喜ぶ。

N子「渡っていくのね，どんどん」

列になって，駆けて渡ったり，這って渡ったり，その都度ルールを決めて繰り返す。

E子「バブバブバブー，アブアブアブー」

H子「アブアブアブアブー，アバババババブー」

N子「ほら這っちゃだめ，だめだよ，赤ちゃんなっちゃだめ」

F子「アバアバばかり言わないのー」

E子，H子「アバババババブー」

N子「もう，アバアバばかりしか言ってないで，もうちょっとねえ，もうちょっといい子になりなさい。出来ないじゃない。もう」

E子「悪い赤ちゃんだからねえ，言うこと聞かないんだよ」

H子「そう，言うこと聞かない赤ちゃんだからーアブブブ」

E子「アバババババブー」 赤ん坊の2人は，床を這い回る。



9月になると，4，5名の小グループで，考えを出し合って遊ぶ姿が見られるようになった。一人の幼児がリードしてすすめるのではなく，グループのメンバー皆が考えを伝え合って遊ぶ特徴がある。自分だけでは思いも寄らぬ考えが他の幼児から飛び出し，遊びが変化していく面白さを味わっているのではないだろうか。

戸外での活動も活発であったが，プラフォーミングでも，様々に工夫して遊ぶ姿が捉えられた。考えが形になって目に見えることから，メンバー同士，共通理解がしやすい。また，周囲からもよく見えることで，別のグループも刺激を受けて同じように作り始め，その後，自分たちなりの工夫をすすめる様子もよく見られた。

## 事例7 【大勢での遊びに参加する 11月】

7, 8名の男児が中心となって10月末から一週間に渡って、毎日新たなお化け屋敷を作ることが続いている。きっかけは、ハロウィン前に、C子がカボチャのお化けを折り紙で折って、棒の先から吊して持ち歩き、友だちを追いかけるなどしていたことから、お化け屋敷を作りたいという声が上がったことである。A男が「どうやって作ろう、先生も考えて」と保育者に参加を求めると、周囲も「先生やろうよ、やろうよ」と同意し、意欲がたいへん強いことが感じられた。プラフォーミングで作ってみることを提案すると、「どうやるの？出来ないでしょ」という幼児が多い中、出来る出来るとN男らを取りかかった。

①11月1日

9:05~

D男「今日はもっと高いやつ、立ったまま通れるのにしようよ」

C男「そうだよな、立ったまま通れないと、お化け屋敷じゃないもんな」

A男「確かに」

数名で積み木を積んで天井になる積み木を頭上に渡す。繰り返し行ったり来たり通って頭が当たらないことを確かめ合っている。

しかし、体が壁に当たり、積み木が崩れる。

P男「だめだ、すぐ倒れる」 I男「丈夫にしようよ」

N男「どうやって？」 I男が積み木を持ってくる。

I男「こう向きに、こうやって置くの」

N男は黙って手伝う。

A男「だめだ、足りない」

I男「そうだ、こう向きにすればいい」

N男「こう向きだよ、こう向きじゃないと倒れるんだよ」

G男「こういうふうには厚い方に向ければ倒れないんだよ」

G男は確かめるように呟く。皆で積み続ける。

G男「大きくしないとみんな入れないよ」

P男「長くしないとさあ、入ってすぐ終わっちゃうし」

G男「そうそう、お客さんいっぱい来るし」

A男「全部使えば大きくなるんじゃない」

G男「でも積み木足りるかな？」

保育者「屋根にもそんなに積み木が必要？」

P男「必要、必要、だってさあ、上に寄っかかたりするから丈夫にしないといけないし」

I男「それから、三角も載せない」と 保育者「三角？」

P男「三角の屋根ってことか」

G男「でも、すこし、崩れさせないとだめだよ、これじゃ、本物っぽくないよ」

P男「そうか、お化け屋敷だもんな」

A男「それ、いいねえ、確かにそうだよ、ほんとお化け屋敷みたいだよ、いいいい」

天井の隙間から、紐で吊したお化け（カボチャの顔や思い思いのお化けを描いて切り抜き紐に付けている）を引っ張ったり、壁の隙間から気味の悪い声を出したりして友達を脅かしている。

P子は片付け間際になって加わった。

保育者「P子ちゃん、もっと早く来れば、もっと遊べるのに」

P子「今来た方がいいんだよ。ちょうど出来上がってるから」

保育者「なるほど、ちゃっかりだね」

P子「面倒じゃなくて、楽ちん」



②11月2日

A男「先生、今日もお化け屋敷しよう」 D男「しようしよう」

A男「でも、出来ないよ」 保育者「どうして？」

A男「だって、出来ないんだもん」 保育者「先生手伝うよ」

D男「D男も」

A男「えっとさあ、えっと、G男、G男君が居ないとね」

D男「そうだね、G男君が居ないとね」

保育者「G男君、どうして？」

A男「G男君、ずっとやってるし、上手だからね」 D男「うん」

A男「呼んで来る」 2人で探しに行く。

A男「いたいた。呼んできたよ、これで安心安心」 D男「安心安心」 N男「俺も手伝うよ」と加わる。

G男「どれどれ、どうするの？」

A男「はい、隊長」（積み木をG男に積んでもらおうとして取りに行き、G男に手渡す）

G男は、その瞬間驚きながらも、すぐに自分が隊長と呼ばれたことに気付いて、頬が緩む。

D男「はい、隊長」

N男も思わず笑っている。

保育者「G男君が隊長なの？なるほどね、お化け屋敷を造るのが上手な隊長か、ぴったりだね、隊長」

G男は恥ずかしそうに笑う。



幼児が本当に出入りできるお化け屋敷を作るために、試行錯誤して成し遂げることは、日頃のプラフォーミングでの様子から予想できた。初めは、ごく小さく、這って中を通るものが作られた。共通の目的で遊びを続けてきた仲間同士が、新たに、立ったまま通れるものを作りたいという目的をもって、考えを活発に出し合いながら工夫する姿が頼もしかった。入って遊ぶことや天井や側面から中の幼児を脅かすことを想定しながら、内側や外側、上から力がかかっても崩れないものを目指すことや、本物らしく、きれいでない仕上がりを求めて、強度に影響しない部分を崩すなど、細かな課題が共通理解され実現していった。また、頼りになる幼児を「隊長」と呼ぶ様子からも、自分たちが同じ目的を持った仲間であることを意識し合っていることが伺えた。

仲間と考えを出し合いながら作り上げることを楽しむだけでなく、次に、屋敷の外から、中にいる幼児の反応を見て喜んでいる。P子のように、毎日、出来上がりの頃を見計らって遊びに来る幼児も非常に多く、一日に一度は全員が屋敷に入っていた。屋敷作りではなく、怖いお化けを造ったり、不気味な声を出しながら操作してみたり、今度は中を通してスリルを楽しんだり、興味に応じたいろいろな立場で体験を楽しんでいた。

大勢でのごっこ遊びは、興味に応じて、いろいろな役割での参加が許容される。保育者が無理にいろいろな役割を作ったり、大勢で遊ぶよう強要したりすると、大勢で遊びは成り立たないと感じながら見守った。

事例8 【気の合う小集団で共通の目的を持って遊びをすすめつつ、他の小集団の遊びを意識し、刺激し合う 10月・12月・1月】

①10月27日

- 9:35 F子, P子がプラフォーミングを箱形に組み、中に入って完全に塞がれた状態を楽しんでいる。  
 9:45 まずB男が近づくと、続けて多くの幼児が「何しているの」と様子をうかがいに来る。その後、中に入りたい幼児が交替で試させてもらっている。その場に残る幼児もいるが、一度経験すると、ほとんどの幼児が自分の遊びに戻っていった。



②12月11日

- 9:00 数日前に、C男, D男, I男が薄いプラフォーミングを積み重ねていたが、同じメンバーが同様の積み方で積み始める。  
 9:20 「入れて」「入れて」と続々と加わり、8名での場作りが始まる。  
 これ以降、数日に渡って、同じ積み方が繰り返された。この積み方を始める幼児を見ると、すぐ隣で競うように積み、出来映えを見比べて喜んでいる姿もあった。



③1月10日 プラフォーミングを保育室の隣の遊戯室に移してある。隣には、中型箱積み木(木製)もある。

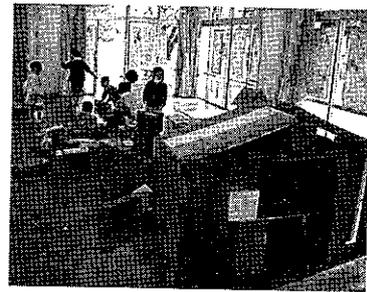
- 9:00 C男, I男が誰もいない遊戯室に入り、家造りを始める。「2階建てにしよう、それか、もっと何階も造ろうか」など言葉を交わしながら手をすすめている。組み立てては、中に入って試し、組み直したりしている。  
 9:30 3階まではプラフォーミングを上手にやりくりして作ることが出来たが、それ以上階を重ねるにはプラフォーミングが足りなくなり、考え込んでしまう。  
 9:40 I男が「こっちの積み木使おう」と言いながら、中型箱積み木に近づき、必要な大きさと形の積み木を選ぶ。  
 9:50 「うわ、すげえ、通ってもいい?通らせて」とE男, B男, J男, M男らが次々に家の中に入る  
 10:00 J男, M男は「手伝ってもいい?入れて」と加わる。



## ④1月16日

C男、I男が中心となり、遊戯室での積み木が数日続いてきた。朝から、家造りが始まり、屋根を付けたいということになった。どのように造ろうか試行錯誤していると、L子、F子らが近づいてくる。2人は「もってあげる」と積み木を押さえ、屋根を造る手助けを始める。

徐々に参加する幼児が増えて、10名以上になる。



ブラフォーミングは、実際に造った場に入入りして遊べるのが特徴である。また、滑りにくい性質を持ち、安定がよいので、様々な組み方が可能であり、変化に富んだ形を作り出すことが出来る。F子、I男とC男は、年間を通して、継続的に、構成する面白さを探求してきた幼児である。自分たちの好奇心によって、試行錯誤しつつ作りすすめる。その後、一緒に造りたいと加わる幼児も自然に受け入れている。出来た場にかかわったり、刺激を受けて他の幼児らが同じように造ったりする様子が頻繁に見られた。大勢がかかわる遊びが成立するためには、遊びを創造し、周囲を受け入れながらリードする幼児の存在が必要である。さらに、仲間との遊びを深めつつ、他の幼児達の遊びにも関心をもち、互いに行き来したり、遊びの様子を見聞きして情報を得たりするところを行いながら、充実感を味わって遊ぶ様子が捉えられた。

#### IV 考察 — 保育内容「人間関係」の充実に向けて —

保育内容「人間関係」の充実に向けて、保育者がしなくてはならない最も大切なことは、幼稚園教育の基本である「環境を通して行う教育」に基づき、「環境」として「幼児同士のかかわりが自然に生まれる状況」を作ることである。それは、目の前の幼児の実態、幼児の内なる欲求を捉えようとするところからまず出発する。そして、幼児が自分からかかわってみたいと思えたり、自然な形でかかわりをもてる状況の中で遊びながらかかわる楽しさを知ったりできるよう、かかわることへの興味が増すような刺激を生活の中に仕組んでいくことである。その際、例えば、同じ保育室の中、同じテラスなどの場、同じように遊具を使える状況が整えられたとしても、個々の幼児によって求めていることや実際のかかわり方は異なる。つまり、同じ時間、同じ場面であっても、その環境は、それぞれの幼児によって異なった意味をもつし、様々な欲求に応じられるよう、刺激となる多様かつ適切な環境を整える必要がある。

「幼児同士のかかわりが自然に生まれる状況」を保障するために、大切な要件3つを以下のように考える。

1つは、時間の保障である。人とかかわりは、言葉で教えられるなどして単純に学べるもの

ではない。幼児が心を動かしてかかわったり、かかわれなかったりするなど試行錯誤したり、意欲をいっぱい膨らませて充分かかわりを深めたりできるような時間を保育者は十分に保障することをまず念頭に置かなくてはならない。さらに、それは、単に時間を長く設けるだけではなく、時には、短時間で活動を切り上げるよう仕向け、それを数日間継続させたり、片付けずに残しながら、午前、午後或いは、翌日といった具合に継続させたり、保育者がリードして弾力的に時間を操作しながら、かかわりの深まりや広がりをサポートしていくことである。

2つめに、かかわり方に応じた空間と遊びの保障である。例えば、大勢で過ごすことだけが人間関係が充実しているということではないと考えると、少数でじっくりかかわりたいのに、遊具や遊びの種類が不足しているために、関わりたい相手との遊びを楽しめないなどである。事例のプラフォーミングでも、他の遊びでも同様の質でかかわる楽しさが保障されるよう、遊びの環境が整えられているからこそ、プラフォーミングでも充実した遊びの姿が捉えられたと考えている。保育者は、その時の幼児に最適な状況を作れるよう環境を構成しなくてはならない。

3つめには、保育者が幼児が周囲とかかわる姿や育ちを柔軟に捉えることである。いつでも誰かと過ごすことや大勢で活動することが必ずしも人間関係の充実している姿とはいえないことを忘れずに、誰かと過ごしていることや大勢で行動している姿を見て安心しないことである。そこで幼児が生き生きと生活できているか遊んでいるかが大切なのである。大勢が参加しているような場面でも、どのような参加の仕方をしているか、一見仲良しに見えるが、本当のところ力関係が固定化したような関係ではないのかなど疑ってみる必要がある。実際に大勢での遊びは、リードする幼児がいたとしても、幼児だけでは成立しない。保育者のサポートがあって継続する場合がほとんどであるが、その場合、そこでの幼児の経験をしっかりと見極める必要がある。また、「協同的な活動」「学級での活動」などといった言葉で一括りにされてしまうが、そこでの十分な経験が保障され得る人数、学級の規模などについては言及されていない現在では、安易に大勢での活動ばかりを保育の中心に位置づけるようなことは避けなくてはならない。

## V 今後の課題

4歳児の1年間、さらにプラフォーミングでの姿に絞って幼児が周囲とのかかわりを広げていく過程を整理することができた。今後は、プラフォーミング以外の遊びの姿も整理し、幼児が様々な遊びを通して周囲とのかかわりを広げる様子を表したい。このような作業が、幼児教育の基本である「遊びを通しての総合的な指導」を大切にする保育の意義を明らかにし、保育の本質を離れない質の高い保育の追求が継続されていくことにつながると考えている。また、4歳児での経験が基礎となり、5歳児ではどのような経験が積み重ねられるのか、事例を丁寧に考察しながら、

その内容と1年間の流れ、過程を明らかにしていきたい。その際、大人の側から、どんな力がついていたのかということではなくて、子どもの中から、どのような育ちの可能性や意欲が熟し、あふれ出し、子どもがどのような生活を求めているのかを、知ろうとする姿勢を大切にしていきたい。

#### 文 献

- 1) 平成17年1月28日中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について」
- 2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター 幼稚園教育指導資料『幼児期から児童期の教育』ひかりのくに株式会社 2005 pp.54-60
- 3) ベネッセ次世代育成研究所『これからの幼児教育を考える』2008 夏号 p.7 同研究所主催のシンポジウムにおける無藤隆氏による基調講演が掲載されている。
- 4) 同上書 p.5
- 5) 座談会「幼稚園教育要領の改善の方向性について」配布資料 2007  
座談会メンバー 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼稚園教育専門部会  
主査 無藤隆 柴崎正行  
文部科学省初等中等教育局幼児教育課 課長 田河慶太
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 2008 p.260
- 7) 同上書 pp.112-113
- 8) 高杉自子著 子どもと保育総合研究所編『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房 2006 pp.11-12
- 9) 前掲書2)に同じ p.56
- 10) 前掲書2)に同じ pp.56-57